

令和5年度 設楽ダム関連発掘調査成果報告会

新設楽発見伝 10

配付資料

日時：令和6年3月9日（土） 会場：設楽町議場

報告会次第・目次

設楽ダム関連埋蔵文化財包蔵地（遺跡）と周辺遺跡

13時30分～13時40分

令和5年度の設楽ダム関連の発掘調査について

尾崎綾亮

・・・4

（愛知県県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室）

13時40分～13時55分

報告1 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査

荒木徳人

・・・6

（愛知県埋蔵文化財センター）

13時55分～14時10分

報告2 万瀬遺跡の発掘調査

荒木徳人

・・・12

（愛知県埋蔵文化財センター）

14時10分～14時25分

報告3 下延坂遺跡の発掘調査

川添和暁

・・・20

（愛知県埋蔵文化財センター）

14時25分～14時50分

報告4 根道外遺跡の発掘調査

川添和暁

・・・24

（愛知県埋蔵文化財センター）

===== 休 憩 =====

15時10分～16時40分

特別講演「設楽が語る、設楽の昔—縄文時代から弥生時代へ」

設楽博己

・・・30

（東京大学名誉教授）

進行・司会 小坂延仁

（愛知県埋蔵文化財調査センター）

万瀬遺跡出土岩偶岩版類について

川添和暁

・・・18

主催



設楽町教育委員会



国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所



（公財）愛知県教育・
スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

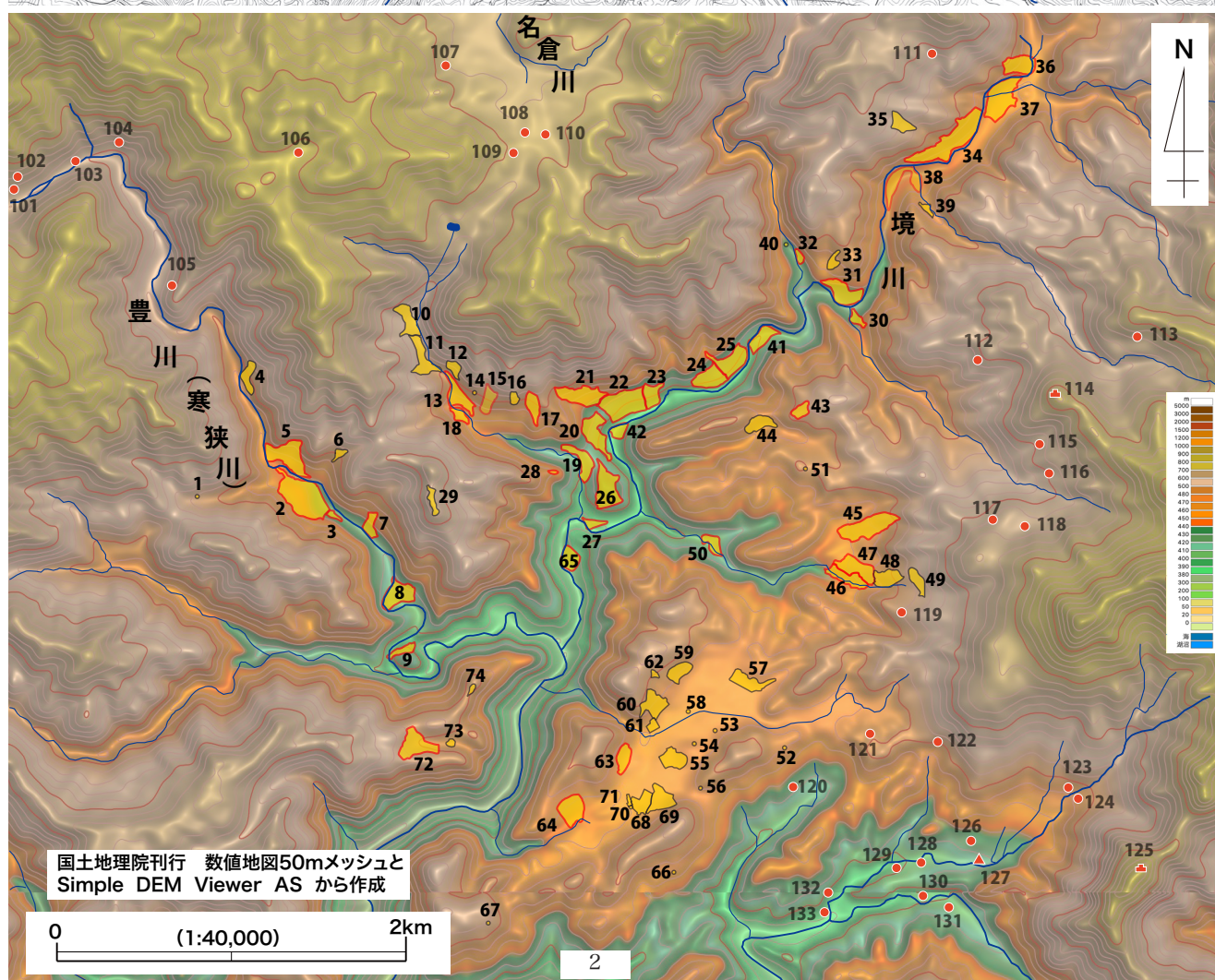
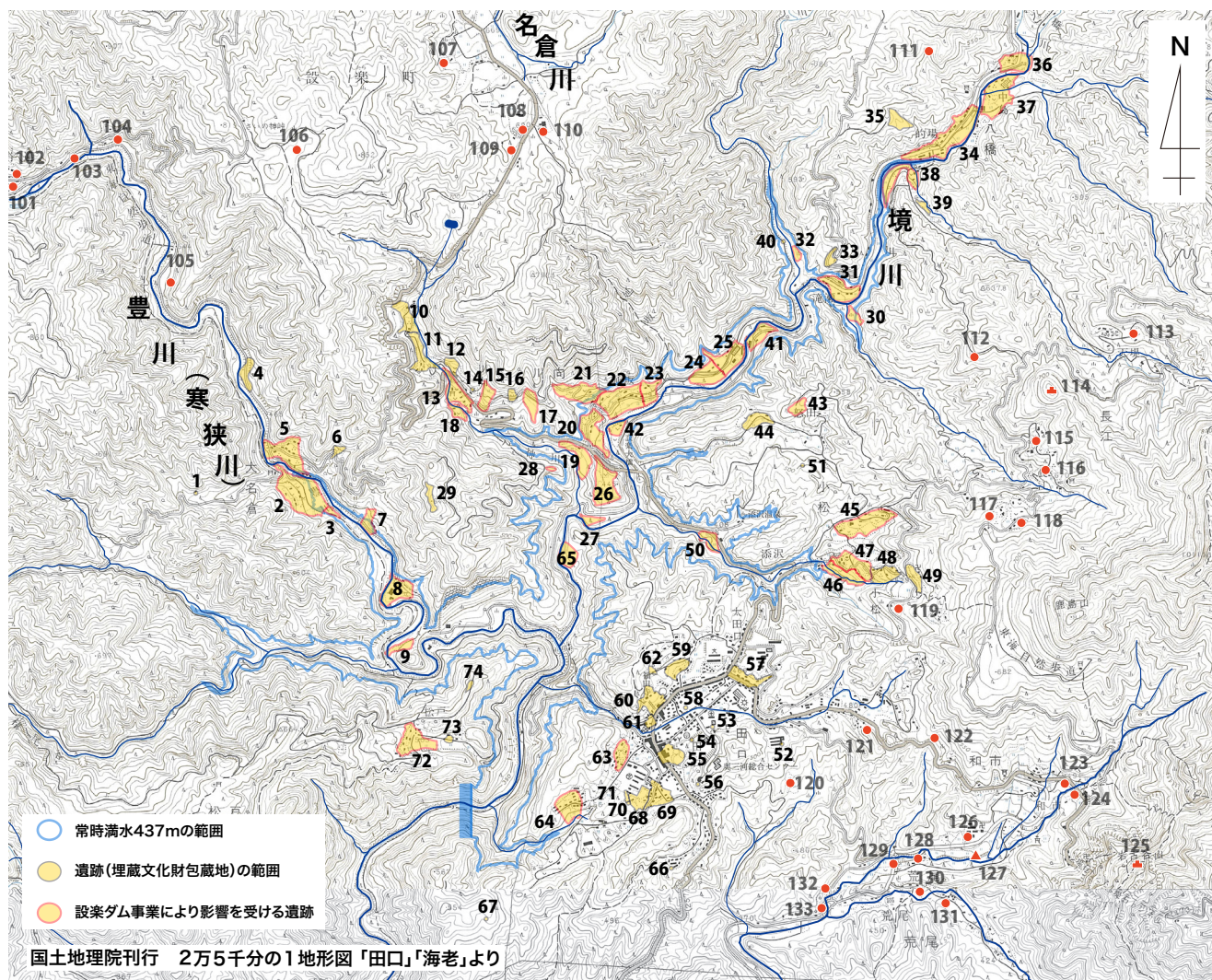


愛知県埋蔵文化財調査センター



愛知県県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室

設楽ダム関連埋蔵文化財包蔵地（遺跡）と周辺遺跡の位置図（遺跡の番号は左表と一致）



令和5年度 ^{した}設^ら楽ダム関連の^は発^つ掘^つ調査^{ちようさ}について

愛知県県民文化局文化部 文化芸術課 文化財室 尾崎綾亮

1. はじめに

2. 令和年度設楽ダム関連の発掘調査について

○令和5年度発掘調査遺跡一覧

2・3頁遺跡番号	遺 跡 名	発掘調査の種別	令和5年度調査面積 (㎡)
20	万瀬遺跡	本発掘調査B	500
22	上ヲロウ遺跡・下ヲロウ遺跡	本発掘調査B	580
25	下延坂遺跡	本発掘調査B	920
32	根道外遺跡	本発掘調査B	825
合 計			2,825

3. 開発事業と埋蔵文化財に関する諸手続きについて

(1) ^{うむかくにん}有^{げんちとうさ}無^さ確認・^{げんちとうさ}現地踏査

○^{いせきちず}遺跡地図、資料・文献等で確認した上で^{げんちとうさ}現地踏査を行い、地表面を観察することで遺物の散布状況を確認し、遺跡の有無及び現状を把握するための調査をします。

(2) ^{しくつ}試掘・^{かくにん}確認調査

○有無確認等で得た情報をもとに、地下の埋蔵文化財の状況を確認するため、必要な箇所を部分的に掘削する小規模な調査です。調査する場所が遺跡として周知されているか否かで、「試掘調査」と「確認調査」に区分されます。重機あるいは人力で掘削作業を行います。

【**試掘調査**】遺跡として台帳・地図に未記載で、周知もされていない場所について、「遺跡の有無」や「範囲・種類・残り具合」等を確認する調査です。

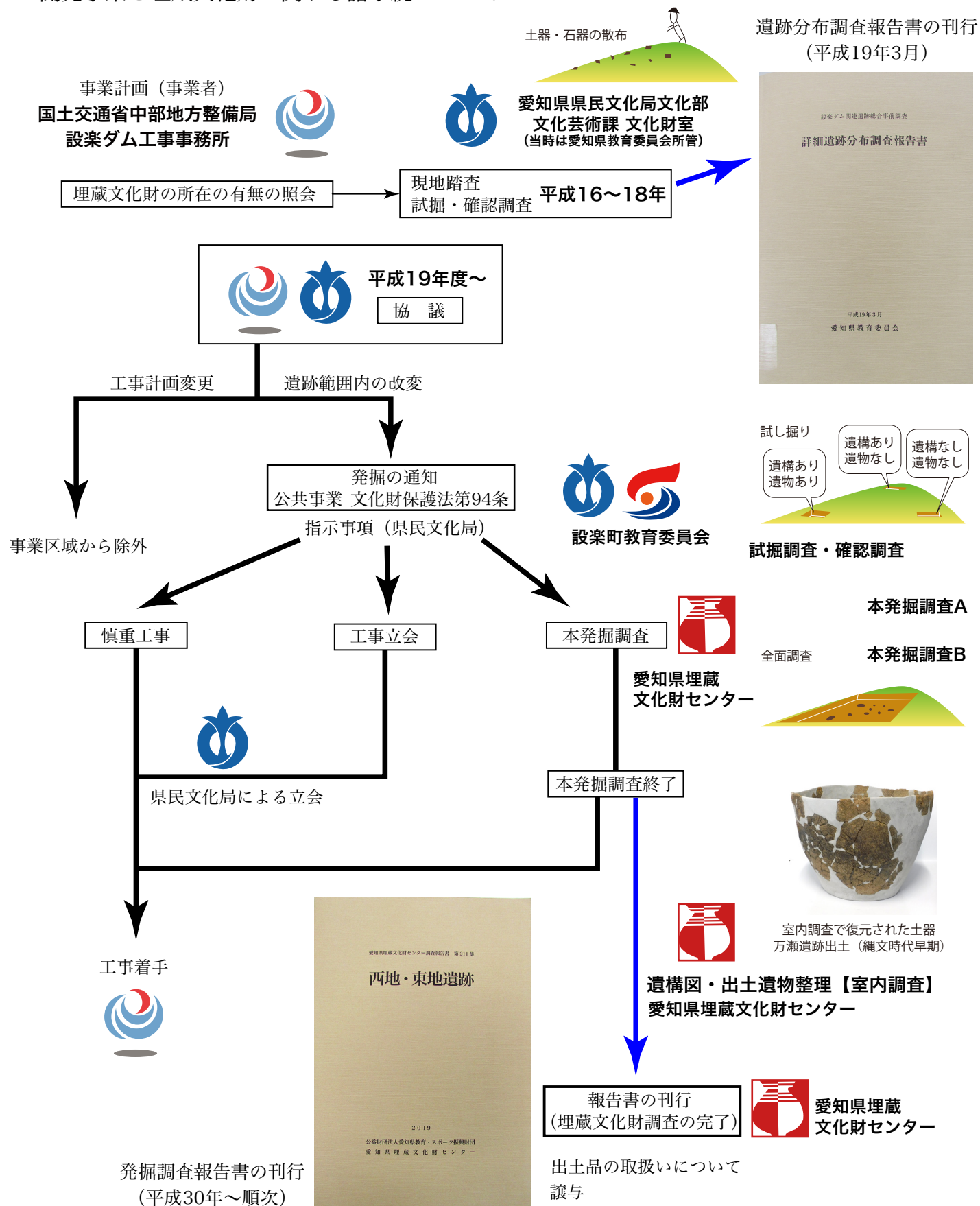
※遺跡がある場合、調査結果から、遺跡の取扱い(^{ほんはつくつちようさ}本発掘調査・^{こうじたちあい}工事立会・^{しんちようこうじ}慎重工事)を決定します。

【**確認調査**】遺跡として既に記載され、周知されている場所について、「遺跡の範囲・種類・残り具合」等を確認する調査です。遺跡の取扱い(本発掘調査・工事立会・慎重工事)を決定します。

(3) **本発掘調査**

○公共事業によって滅失する遺跡の記録保存のために行う発掘調査です。調査対象地全面を発掘調査する「本発掘調査B」を基本とし、Bの実施前には、遺跡範囲・規模をさらに詳細に確認するために、事前調査「本発掘調査A」を行います。

開発事業と埋蔵文化財に関する諸手続について



開発事業と埋蔵文化財調査の流れ

かみ 上ヲロウ・しも 下ヲロウ遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 荒木 徳人

所在地：北設楽郡設楽町川向字上ヲロウほか（北緯35度06分51秒 東経137度34分05秒）

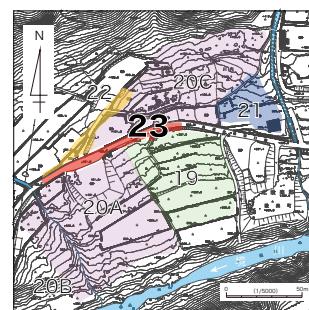
調査期間：令和5年6月～7月

調査面積：580㎡

調査担当者：鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

立地と環境

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地します。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる土石流堆積の累積によって形成されています。今年度の調査区は県道432号小松田口線道路直下に位置しており、調査前の標高は地表で396～403mを測ります。



上ヲロウ・下ヲロウ遺跡
調査区位置図

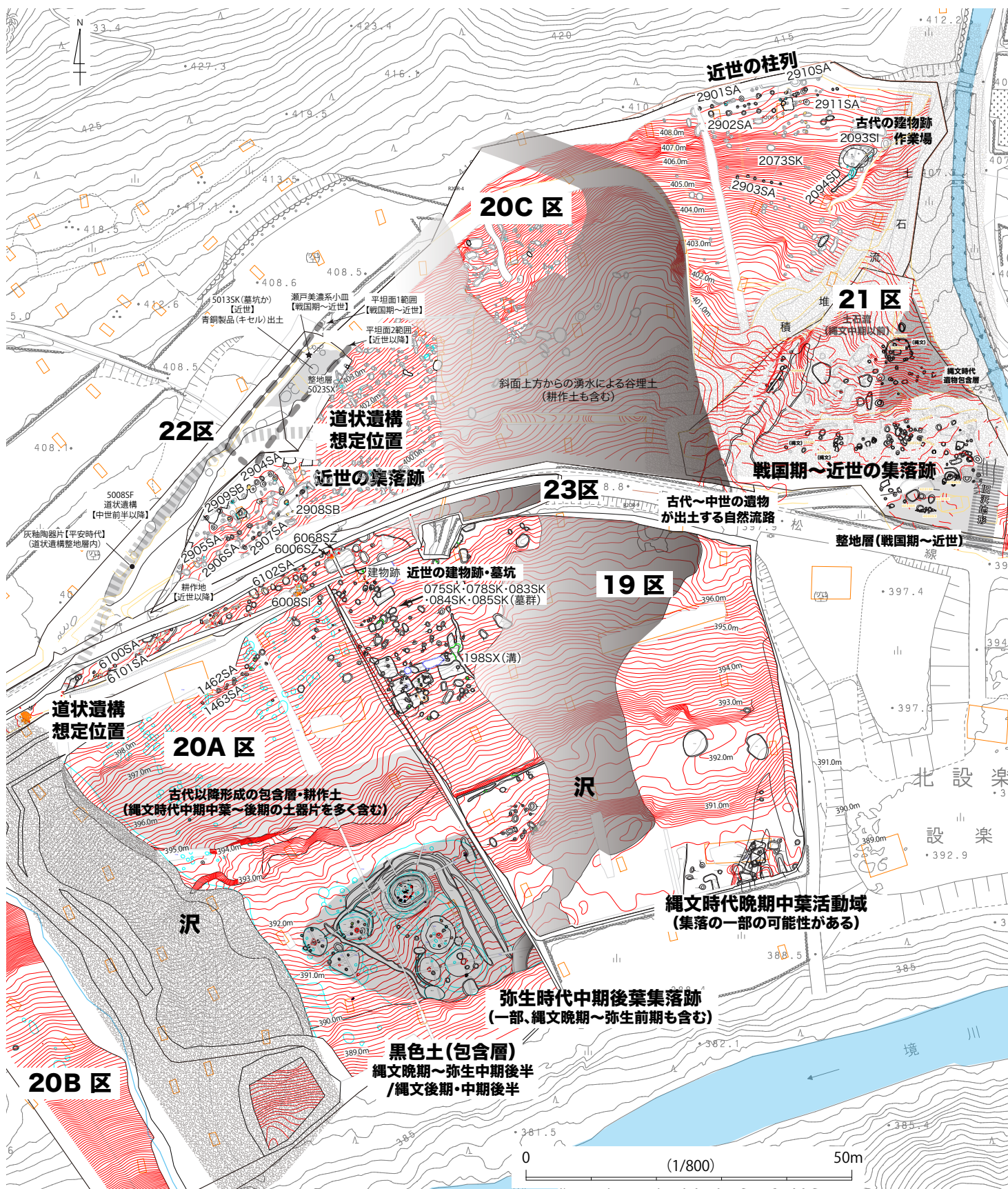
令和5年度の調査成果

これまでの上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査では、縄文時代中期中葉以降、近世に至るまでの遺構・遺物が確認されています。今年度の調査では中世前半以降から近世にかけての遺構や遺物を確認しました。調査区の東端は20C区および19区でも確認されている谷地形がのびており、調査区の西側に向かうにつれて、地形の高まりが確認されました。遺構は谷地形より西側にかけて展開していました。

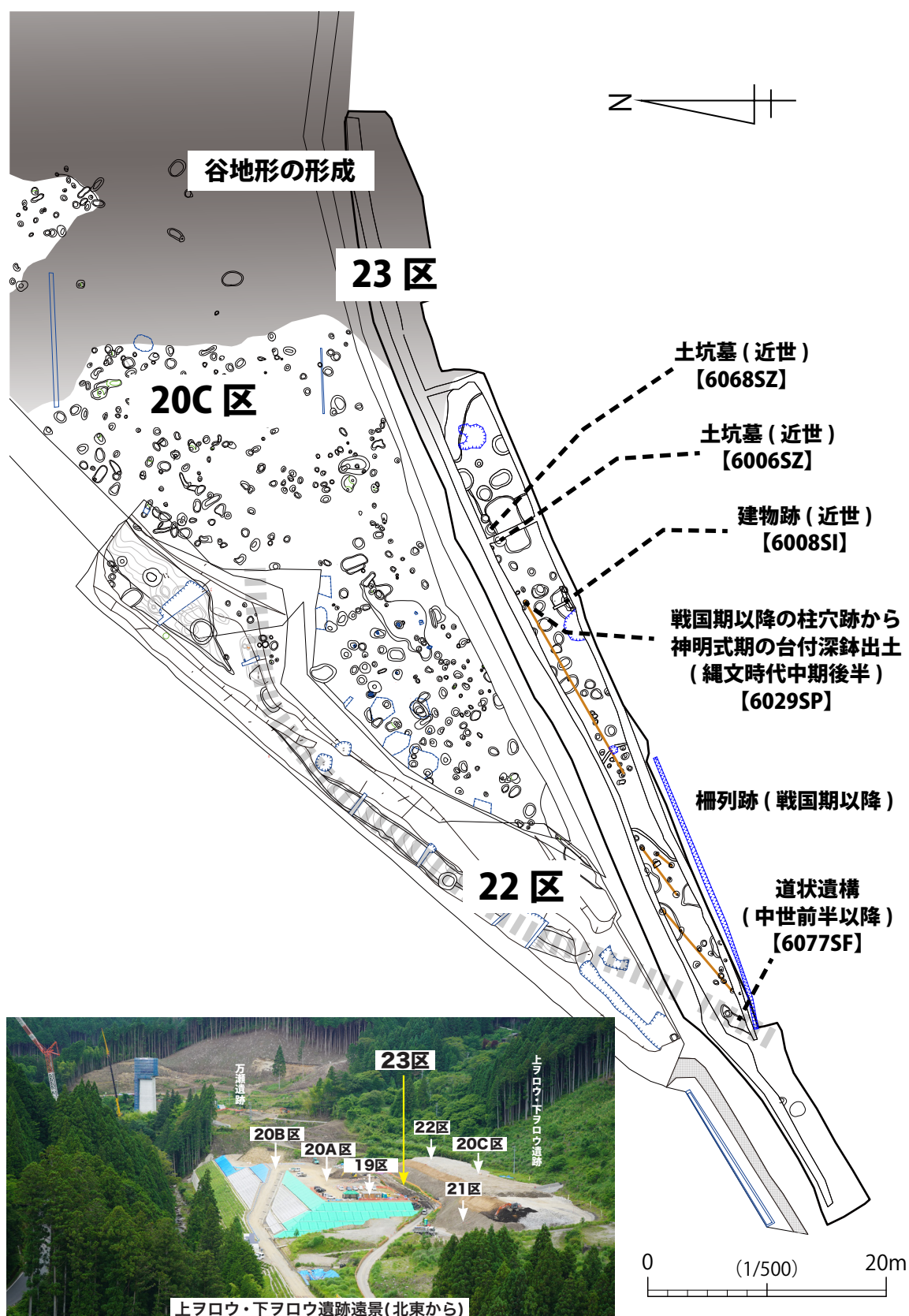
今年度の調査では6006SZと6068SZの土坑墓2基が確認されました。6006SZは楕円形の土坑墓で、粘土質の埋土の上に径10cm程度の礫が多数埋め込まれていました。土坑墓の底部では煙管、銅鏡、鉄製品、繊維製品、灰釉摺絵鬘盥等の副葬品が出土しました。設楽ダム関連の発掘調査では、多くの土坑墓とそれに伴う副葬品が出土していますが、銅鏡や灰釉摺絵鬘盥の出土は今回が初めてです。



上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 23区 上空写真（上が西）



上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 遺跡全体図【弥生時代以降 (一部縄文時代晩期を含む)】



調査区全体図 (S=1/500)

6006SZ内の金属製品は脆弱^{ぜいじゃく}なものもあったため、土ごと取り上げました。土には多くの水分が含まれており、遺物の劣化をできる限り進行させないため、室内にて早急に付着している土を取り除きました。その過程で銅鏡の裏面には繊維^{もんよう}が付着していることが確認されました。銅鏡の裏面に付着していた繊維を取り除くと紋様が確認されました。

しかし、今回出土した金属製品は土や錆に覆われており、そのままでは形状を詳細に確認することができなかつたため、X線透過撮影^{えつくすせんとうかさつえい}を行いました。その結果、銅鏡の裏面には流水紋と江戸時代の鏡師である藤原の銘が施されていることが明らかとなりました。今回出土した鉄製品の中にも、繊維が付着しているものがあり、X線写真から近世の副葬品で良く見られる毛抜き^{けぬ}であることがわかりました。これらの繊維は今後、整理作業の過程でどのようなものか明らかになってくると思われます。

灰釉摺絵鬘盥は扁平な筒状の形状をし、表面には摺絵で紋様が施されており、ほとんど完品の状態で出土しました。摺絵とは紋様を切りぬいて穴が空いた紙形を用いた絵付けの手法のことです。こちらの灰釉摺絵鬘盥は瀬戸美濃窯産で18世紀前半頃のものであると考えられます。



灰釉摺絵鬘盥 (横から)



灰釉摺絵鬘盥 (上から)



土坑墓 6068SZ (南から)



6068SZで出土した鉄釉丸椀



土坑墓 6006SZ 検出時の状況（東から）



土坑墓 6006SZ 副葬品の出土状況（南から）



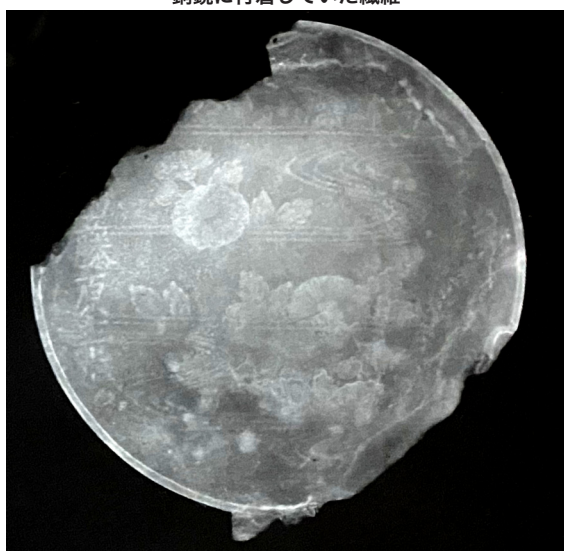
銅鏡の取り上げ時の状態



銅鏡に付着していた繊維



銅鏡に施された紋様



銅鏡のX線写真



繊維が付着している鉄製品



繊維が付着している鉄製品のX線写真

6068SZ に隣接した場所に位置する6068SZは近世以降の整地や耕作により、土坑墓の一部が滅失していましたが、残存している形状から楕円形であると考えられます。この土坑墓の底部からは寛永通宝^{かんえいつうほう}、鉄釉丸碗^{てつゆうまるわん}が出土しました。鉄釉丸碗はほとんど完品の状態で出土しており高台部^{こうだい}以外には釉薬のツケガケが施されています。

調査区の中央から西側に進むにつれて、過去の調査区でも度々確認されている中世前半以降の道状遺構と戦国期以降の柵列^{さくれつ}が見つかりました。道状遺構は22区で確認されたものの続きが検出されました。

また、柵列を成す柱痕^{ちゅうこん}(6029SP)からは縄文時代中期後半の神明式期の台付深鉢^{しんめいしきき}の台部分が出土しました。遺構の年代は戦国期以降ですが、20C区でも縄文時代中期後半の活動痕跡があることから、斜面上方から紛れ込んだものであると考えられます。

調査区の中央付近では建物跡(6008SI)が見つかりました。建物跡内からは近世の搥鉢片^{すりばち}や鍋片、被熱を受けた台石(金床石^{かなどこいし})が出土しました。これらの遺構は近世の段階で鍛冶関連の作業場として使われていたものと考えられ、落ち込みが重複しているのは、建て替えが行われていたからだと考えられます。



道状遺構 6077SF (北東から)



柵列遺構 (東から)



神明式期の台付深鉢の出土状況 6029SP (東から)



建物跡 6008SI (南東から)

まんぜ 万瀬遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 荒木 徳人

所在地：北設楽郡設楽町川向字マンゼ（北緯35度06分46秒 東経137度33分54秒）

調査期間：令和5年7月～令和5年9月

調査面積：500m²

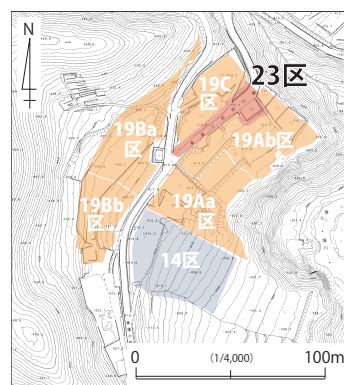
調査担当者：鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

立地と環境

万瀬遺跡は豊川支流の一つである境川右岸に所在し、
きゆうりょうまつたん かんしやめんじょう
丘陵末端の緩斜面上に立地します。今年度の調査区は
県道432号小松田口線道路直下の位置にあたり、19A区
と19C区の間となります。調査区の調査前の標高は412
～415mです。

令和5年度の調査成果

調査はちゆうせい きんせい
中世から近世の遺構を中心とする上面、じょうもんじ
縄文時代早期前半を中心とする下面の2面に分けて行われました。上面では、主な遺構が
かじ
鍛冶関連の遺構と土坑墓、下面では縄文時代早期前半の遺物包含層、竪穴建物跡や
えんどうつきろあな
煙道付炉穴が確認されています。



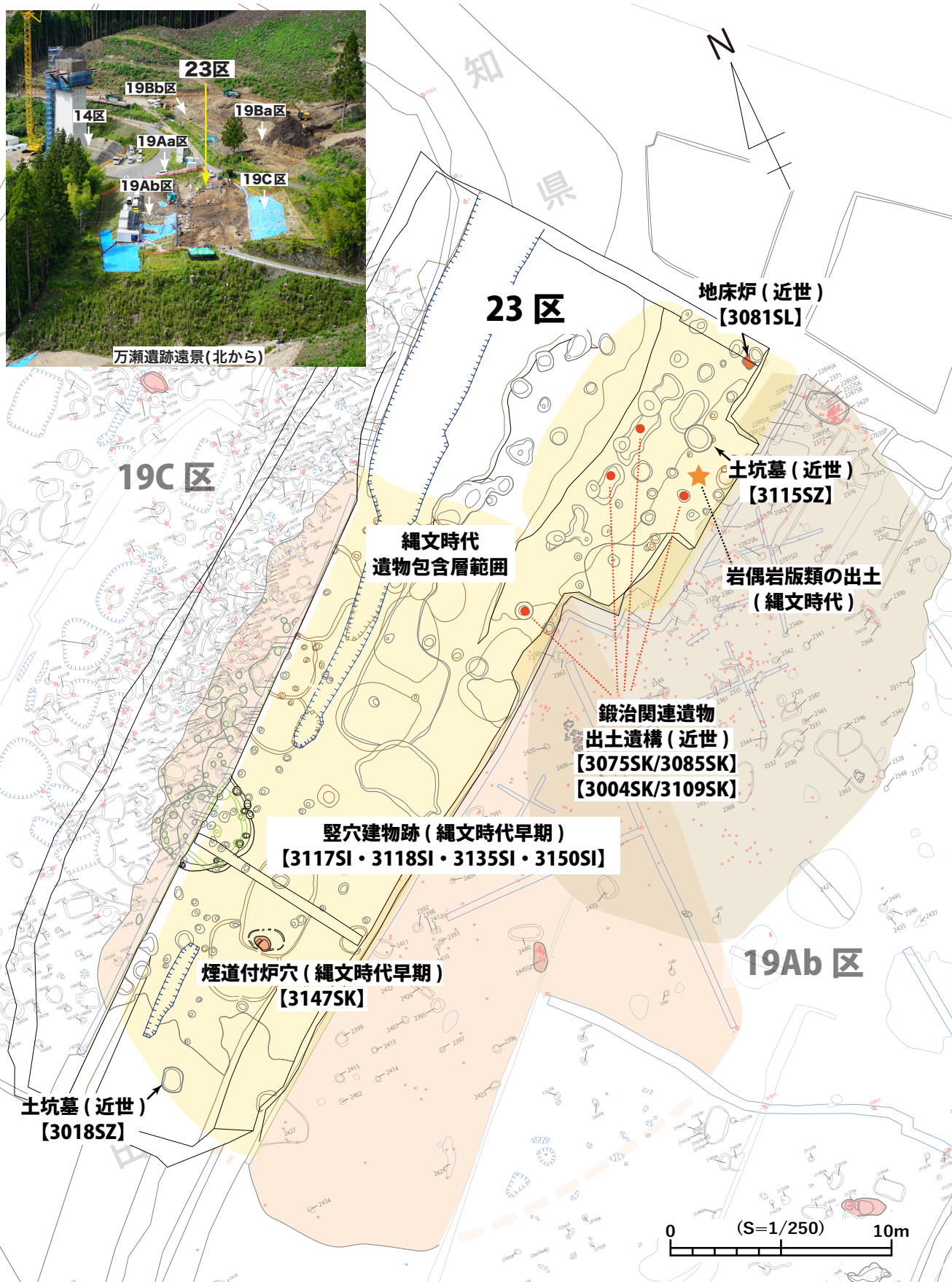
万瀬遺跡 調査区位置図

(1) 中世から近世

調査区の東端に位置するへいたんめん
平坦面からは鍛冶関連の資料がまとまって見つかりまし
た。3081SLと3082SLでは焼土を多く含む地床炉が確認されました。また、3074SK



万瀬遺跡 23区 全体写真(上が東)



万瀬遺跡 23 区 全体図 (S=1/250)



地床炉 3081SL・3082SL (南西から)



土坑 3085SK 鉄滓の出土状況 (南から)

と3085SKからは鉄滓^{てつさい}が、3004SKと3109SKからは多量の炭化物が出土しており、周囲にピットなどもあることから、この平坦面は鍛冶関連の活動が盛んに行われた場であったと考えられます。

今回の調査では3018SZと3115SZの土坑墓が2基確認されました。3018SZは調査区の西端に位置する隅丸方形状^{すみまるほうけいじょう}の土坑墓です。土坑墓内からは人骨や歯が見つかり、それに伴う副葬品も多数、出土しました。人骨は脆弱^{ぜいじやく}でしたが、頭蓋骨^{とうがいこつ}と歯列^{しれつ}が確認できる状態で残っていました。

副葬品は寛永通宝^{かんえいつうほう}、鉄製品^{てつせいひん}、煙管^{きせる}、小玉^{こだま}、木片が出土しました。小玉は80点以上出土しており、色調から乳白色、オリーブ色、黒色の3種類に分類することができます。



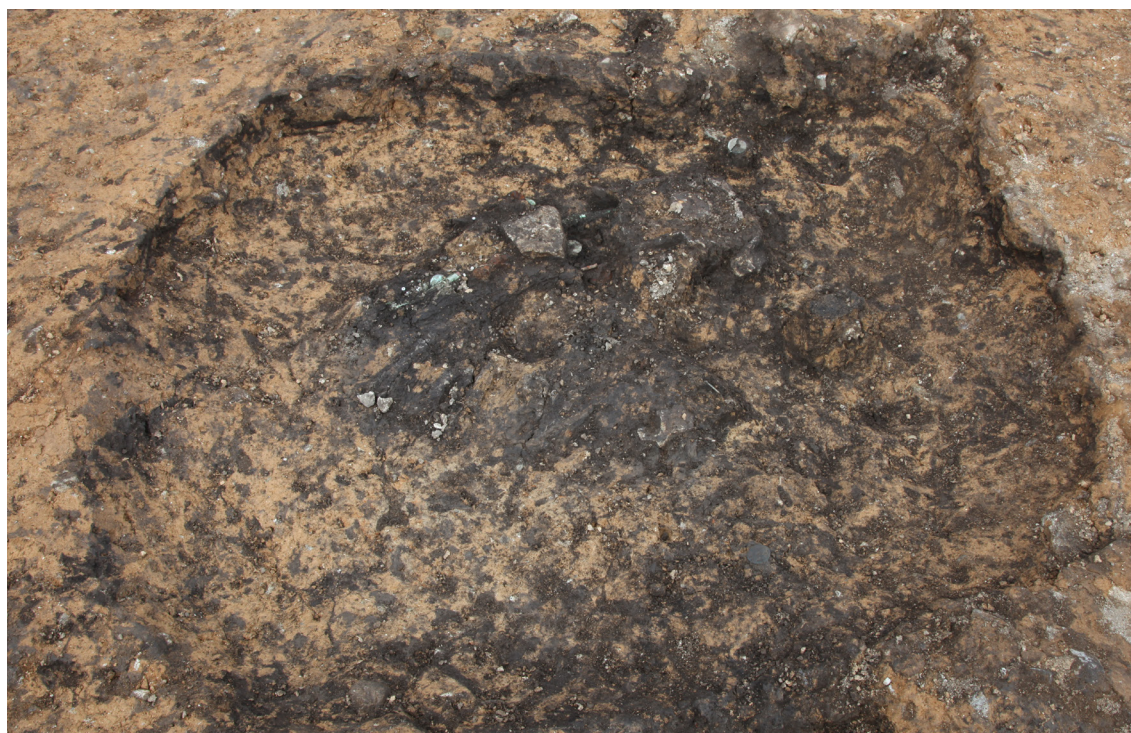
土坑墓 3018SZ 副葬品の出土状況 1 埋土上面【近世】(南東より)

オリーブ色は1点、黒色は2点、確認されており、それ以外は乳白色のものとなります。これらがどのような素材でできているのか把握するために、^{けいこう せんぶんせきそうち}蛍光X線分析装置という機器を用いて小玉に含まれている成分の分析をしました。

その結果、乳白色とオリーブ色の小玉は^{なまり}ケイ素(Si)と鉛(Pb)を主成分とする鉛ガラスであることが明らかになりました。一方、黒色の小玉は鉛がほとんど含まれておらず、ケイ素(Si)と鉄(Fe)を主成分とし、カリウム(K)とカルシウム(Ca)が少し含まれていました。現状、^{こうぶつ}鉱物由来のものなか、人工的に製造されたガラスなのか判断することは難しいですが、カリウム(K)とカルシウム(Ca)が含まれていることからカリ石灰ガラスの可能性も考えられます。しかし、江戸時代では鉛ガラスが主流であったため、今後はさらに分析を進め、明らかにしていく必要があります。



土坑墓 3018SZから出土した小玉 (左：出土状況、右：取り上げ写真)



土坑墓 3018SZ 副葬品の出土状況2 遺構底面【近世】(南東より)



土坑墓 3115SZ 副葬品の出土状況(南東より)



土坑墓 3115SZで出土した灰釉摺絵鬘罎

3115SZは調査区の東端に位置する^{だ えんけい}楕円形の土坑墓です。3115SZでは^{し し こつ}四肢骨の一部が確認できる人骨や煙管、鉄製品、^{かいゆうす り えびんだらい}灰釉摺絵鬘罎が出土しました。灰釉摺絵鬘罎は今年度の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査で確認された土坑墓からも出土しています。3018SZと3115SZから出土した骨はどちらも焼けていないことから土葬であり、土坑墓の大きさから座葬であったことがわかります。

また、上面では調査区の東側から^{がんぐうがんぼんるい}岩偶岩版類が出土しました。形状は長円形、長さ4.3cm、厚さは2.2cmあり、中央に深く溝が1条、上部に6条の細い横線が刻まれています。岩偶岩版類は縄文時代のものであるが、恐らく、中世から近世の造成によって混在したと考えられます。

(2) 縄文時代早期前半

19Aa区・Ab区・C区では^{ろ あな しゅうせき}炉穴、集石炉跡、^{しゅうらくあと}竪穴建物跡が見つかっており、縄文時代早期前半を主体とする集落跡が確認されています。また、19C区と19Ab区でも確認されている捨て場と考えられる遺物包含層は23区でも確認されており、過去の調査区との繋がりが見えました。

19C区を調査した際に重複した竪穴建物跡が確認されていましたが、今年度の調査区である23区でも、その続きが見つかっています。今年度の調査では31171SI、3118SI、3135SI、31150SI、計4基の竪穴建物跡が重複した形で確認されました。

今回の調査では^{えんどうつきろ あな}煙道付炉穴も1基確認されました。炉穴内には石器、^{おしがた}押型文土器片や^{もん}撚糸文土器片^{よりいともん}が形状のわかる状態で出土しました。炉穴内の埋土



万瀬遺跡出土岩偶岩版類【縄文時代後期～晩期】

は2層になっていたことから、複数回にわたって何度も使用していたことが考えられます。今回出土した土器には煤も付着しており、今後はこの煤を試料とした自然科学分析によっても、この煙道付炉穴の使われていた年代が明らかになるものと期待されます。



少なくとも4棟の重複が確認された竪穴建物跡完掘状況【縄文時代早期前半】(北東より)



煙道付炉穴3147SK 検出状況【縄文時代早期前半】(南より)



煙道付炉穴3147SK 上層遺物出土状況(南西より)



3147SK 上層および下層遺物出土状況(北東より)



煙道付炉穴3147SK 完掘状況【縄文時代早期前半】(南より)

まんぜ がんぐうがんばんるい 万瀬遺跡出土 岩偶岩版類について

愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁

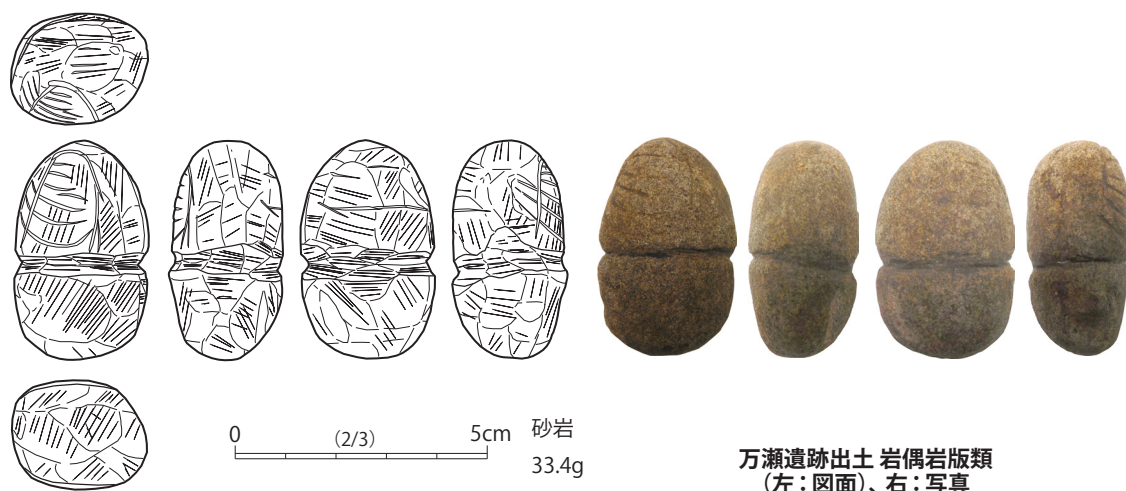
出土の経緯

本誌16頁にもありますように、今年度の万瀬遺跡の発掘調査では、岩偶岩版類が1点出土しました。出土場所は、中世以降に鍛冶（恐らく野鍛冶か）を行っていた平坦面（作業場所）に当たります。縄文時代の遺物である本資料が、何かの事情で入り込んだものと考えられます。

資料の形状と時期

長さ4.4cm・幅2.7cm・厚さ2.3cm、重さ33.4gで、砂岩で作られています。図面・写真の上側が尖り気味で、下側は丸みを帯びています。身部の中央には横方向に太い溝（沈線）が刻まれており、平面の形を見るとヒサゴの形をしています。上下から見ると、隅丸方形と、厚みがあります。幅の広い面には横方向の太い溝の上側に、細い線で文様が刻まれています。一面には逆U字での囲みに対して横方向に短い線刻（弧線）が連続して施されています。もう一方の面には横方向の短い線刻が上下二条にわたり施されています。この文様は、ヒトの上半身部を表現したものではないかと考えられますが、詳細は今後の検討で明らかになると思います。

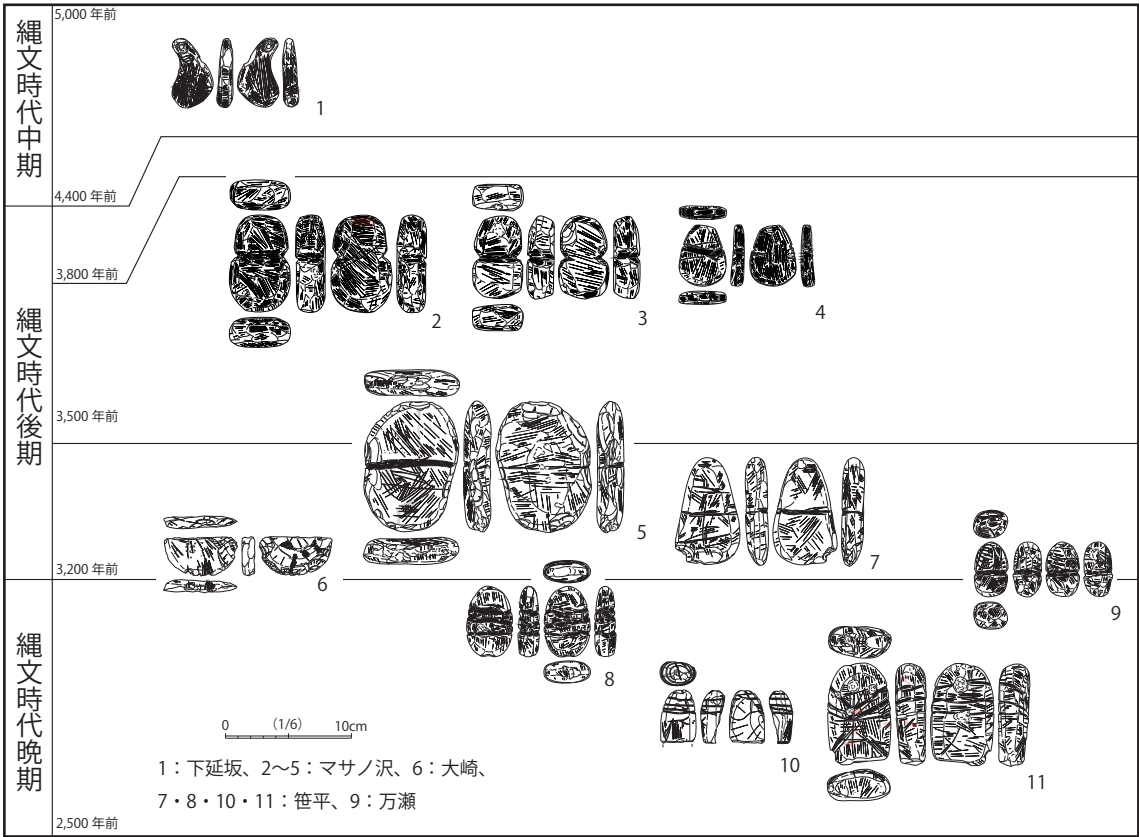
万瀬遺跡では、縄文時代早期前半（今から10,000年前頃）の集落が見つっていますが、これまでの類例などから、この資料は縄文時代後期～晩期（今から4,000～3,000年前頃）に属するものと考えられます。斜面上方の19C区では、大型石棒のような使われ方をした棒状礫が出土しており、これも縄文時代後期以降に属するもの



と考えられます。土の堆積が乏しく、斜面下方に流出することが多かったこともあり、他の縄文時代の後期～晩期の遺物はほとんど残らなかったものと考えられます。

設楽町内での岩偶岩版類

設楽町内では、土偶の出土は^{さきだいら}笹平遺跡や^{まさのさわ}マサノ沢遺跡で知られているものの、その点数は極めて少ないのが実情です。一方、^{せんごくれき}線刻礫を含めた石で作られた^{ひとがた}人形（岩偶岩版類）は、ここ十年にも及ぶ設楽ダム関連発掘調査で、80点以上と多数見つかっておこの地域の主要な祭祀具であったといえます。下図では、その代表的な事例を時期順に示しました。現在最も古い事例は、^{しものべさか}下延坂遺跡の縄文時代中期後半のもの（1）で、^{かんじょう}上端の環状で頭部を表現しています。資料数が多くなるのは、縄文時代後期の中頃からです。マサノ沢遺跡や笹平遺跡では、^{すいてき}ヒサゴ形あるいは水滴形のものが知られています（2～5・7）。この形状は同時期の^{ふんどうがたどく}分銅形土偶に類似していることから、女性を表現しているものが多いと思われます。大崎遺跡の事例は欠損していますが、同様の形状のものであったと思われます（6）。2～4と6は墓坑から出土しています。縄文時代晩期にかけては断面に厚みのあるものが目立つようになります（9～11）。次第に男性を象徴する^{せきぼうさいし}石棒祭祀との関係性が見られるようになるようになります。



設楽町内で出土した岩偶岩版類の変遷

しものべさか

下延坂遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 川添 和暁

所在地：北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂（北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒）

調査期間：令和5年9月～令和5年10月

調査面積：920㎡（調査の都合上、24Aa区・24Ab区・24Ac区・24Ba区・24Bb区の5調査区に分ける）

調査担当者：鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

立地と環境

調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県民文化局より委託を受けて、令和4年9月から10月にかけて実施しました。調査面積は920㎡で、調査対象地は町道79号道路敷内です。細長い調査区であったこともあり、北から順に、23Aa区、23Ab区、23Ac区、23Ba区、23Bb区の5ヶ所に分けて発掘調査を実施しました。

下延坂遺跡は境川右岸の川岸段丘^{かがんだんきゅう}から山麓の丘陵斜面に立地しています。町道79号は遺跡範囲中央を北東から南西に向かって貫くように延びています。このラインがちょうど北西から南東方向へと境川に向かって傾斜する地形の変換点に当たります。下延坂遺跡は、これまで令和2（2020）年度から令和4（2022）年度までの3年にわたって発掘調査が実施されています。今年度の調査区とこれまでの調査区との位置関係は以下の通りです。23Aa区は20A区および22A区の上に、23Ab区は20B区と21C区の上に、23Ac区は20B区と22Ba区の上に位置します。また23Ba区は20C区と22Bb区の上に、23Bb区は20C区と22C区の上に位置しています。

調査の成果

基本層序は23Ac区西壁の土層断面で見ることができました。上からの順番で、

I層：表土・盛土・灰褐色粘土（道路整地層、旧耕作土1、120cm）【近代以降】

II層：灰褐色粘土（旧耕作土2、80cm）【近世】

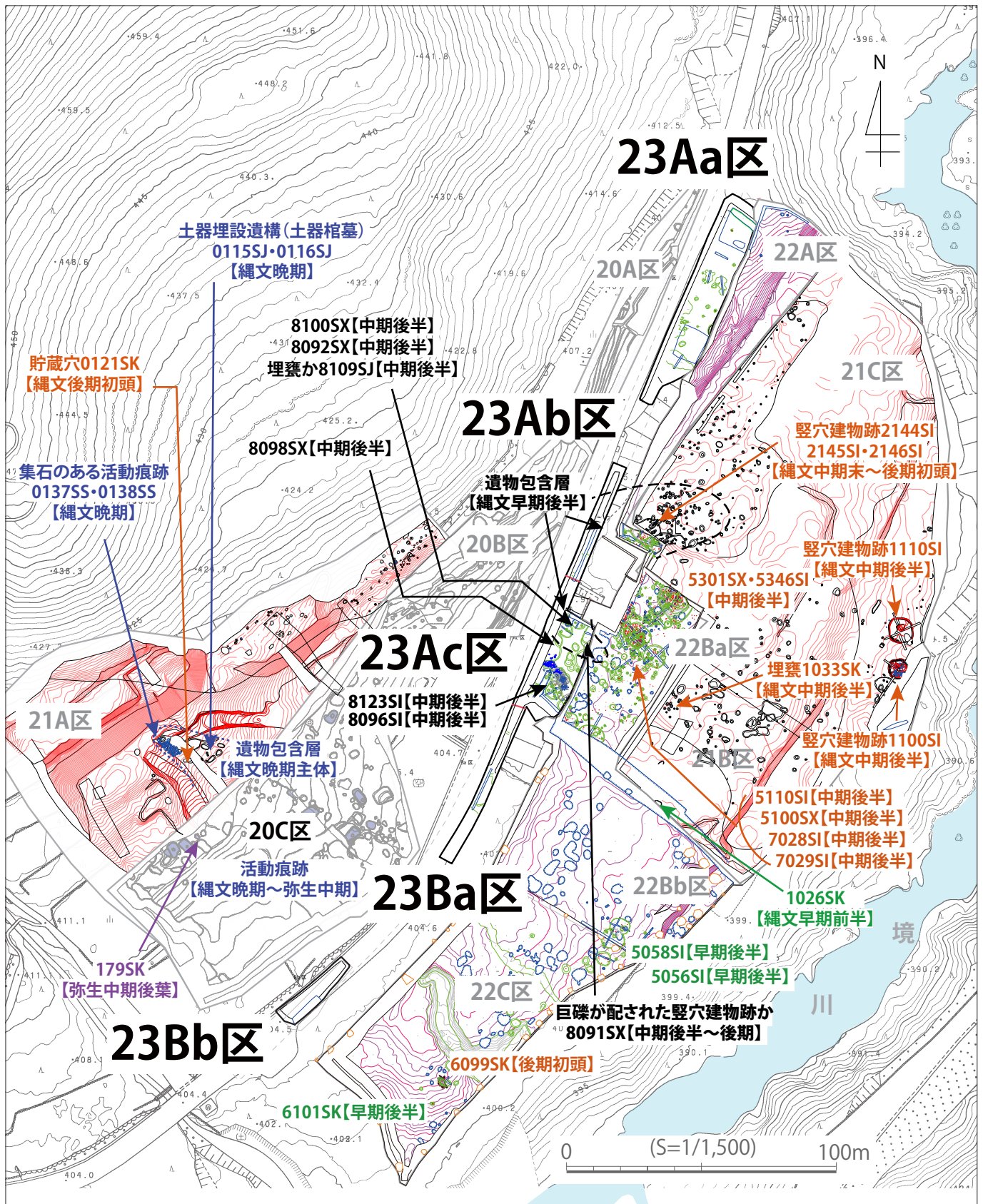
III層：灰褐色粘土（旧耕作土3、40～60cm）【戦国期～近世】

IV層：黒褐色粘土^{いぶつほうがんそう}（遺物包含層、60cm）【縄文時代中期～中世】

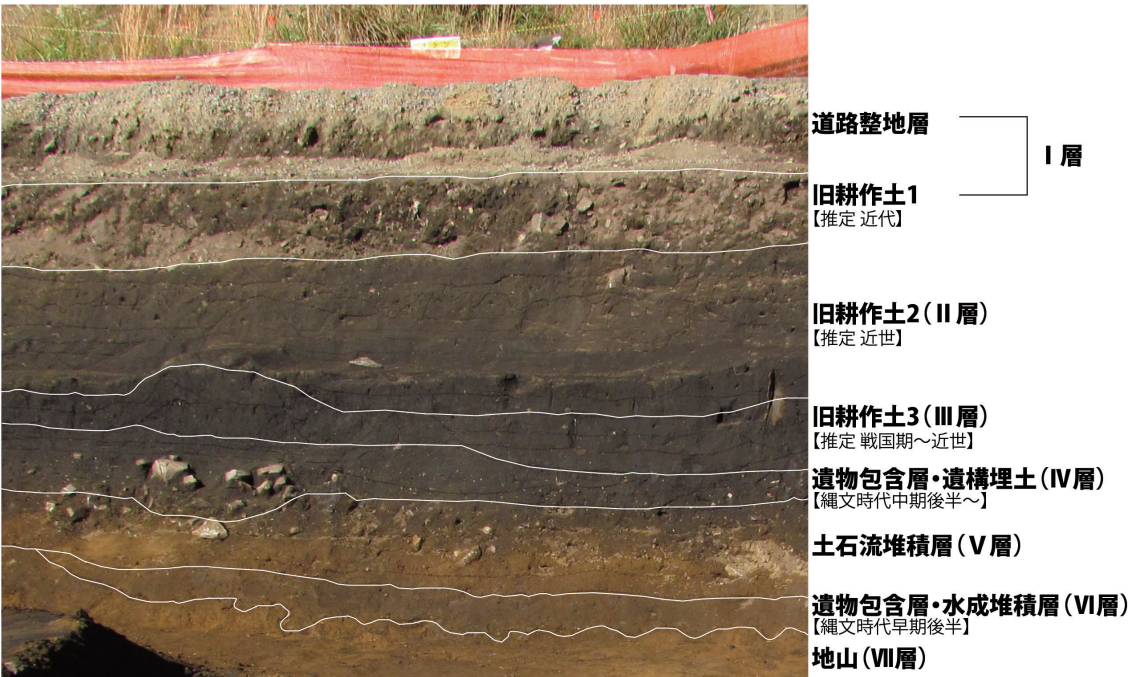
V層：茶褐色の砂礫層^{どせきりゅうたいせきそう}（土石流堆積層、20cm）【縄文時代前期か】

VI層：灰褐色粘土質シルト層^{すいせいたいせきそう}（水成堆積層・遺物包含層、20cm）【縄文時代早期後半】

VII層：一部砂礫を含む黄褐色粘土・シルト層、です。



下延坂遺跡 全体図



23Ac 区西壁 土層断面写真

地形は、23A区から23Ab区に向かって傾斜しており、23Ba区ではV層の堆積が厚くなっていることで、高まりを持つ地形となっていました。

各調査区の調査成果をまとめると、下表ようになります。

調査区		23Aa 区	23Ab 区	23Ac 区	23Ba 区	23Bb 区
堆積層	I	○	○	○	○	○
	II	○	○	○	○	○
	III	○	○	○	○	×
	IV	×	○	○	×	×
	V	○	○	○	○	○
	VI	×	○	○	△	△
	VII	○	○	○	△	△
検出遺構【時代など】		耕作地【戦国期～近世】	耕作地【戦国期～近世】	耕作地【戦国期～近世】 竪穴建物跡 4・土坑・ピット 【縄文時代中期後半】	耕作地【戦国期～近世】	谷地形・耕作地耕作地【戦国期～近世】
出土遺物		弥生土器片	縄文土器・石器	縄文土器・石器	縄文土器・石器	縄文土器

※ ○は確認された層、×は存在が認められなかった層、
△は地中深くに存在していることが想定されるが、安全上理由から掘削が及ばず存在自体が確認できなかった層

23Ac 区は遺跡の状態が最も良かったため、II層上面、III層上面、IV～V層上面で調査を実施し、最後にVI層の範囲を確認しました。V層上面では、縄文時代中期後半に属する竪穴建物跡が4基調査されたものの、石囲炉跡の炉石はいずれも残されていなかったようです。8091SXでは、掘り方隅で一行に配された巨石群が見つかりました。詳細は不明ですが、竪穴建物跡の構造の一部であると考えられます。



23Bb区 全景(南より)



23Ba区南半分 (南より)



23Ac区近世耕作地 全景(北より)



23Ac区戦国期～近世耕作地 全景(北より)



23Ac区 縄文時代遺構全景(上が西)



23Ac区 8091SX(南より)



23Ac区 8123SI(北より)



23Ac区北壁 土層断面

ねみちそと 根道外遺跡の発掘調査

愛知県埋蔵文化財センター 川添 和暁

所在地：北設楽郡設楽町八橋字根道外（北緯35度07分23秒 東経137度34分42秒）

調査期間：令和5年11月～令和6年1月

調査面積：825㎡

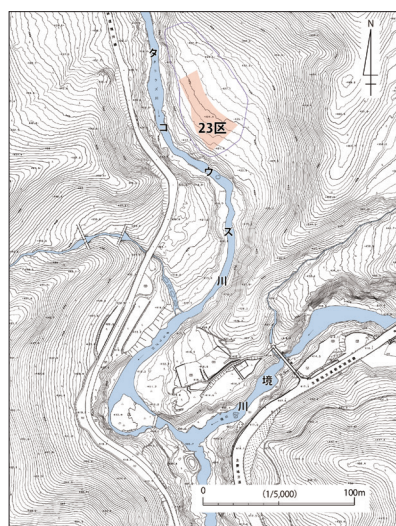
調査担当者：鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

立地と環境

調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて、令和4年11月から令和5年1月にかけて実施しました。調査面積は825㎡で、調査対象地は遺跡範囲の南西側に当たります。

根道外遺跡は、境川とタコウズ川との間にある細尾根が北東から南西に向かって延びる緩斜面上に立地します。遺跡は北から東側に屈曲して流れるタコウズ川の左岸にあり、調査前の標高は420～426mです。この場所は、境川とタコウズ川の合流点「べんてんぶち」から、北に約300mの距離に当たります。

遺跡の北側・東側・南側は、片麻岩を岩盤とする尾根筋^{へんまがん}によって遺跡全体が囲われています。このなかで北東から南西方向に向かって土石流堆積^{どせきりゅうたいせき}が繰り返し起きていて、緩傾斜の高まりができています。



根道外遺跡遺跡位置図

調査の成果

基本層序は、以下の様に整理できます。上から

I層：表土（5cm）

II層：灰褐色粘土（旧耕作土、20～30cm）【近世以降】

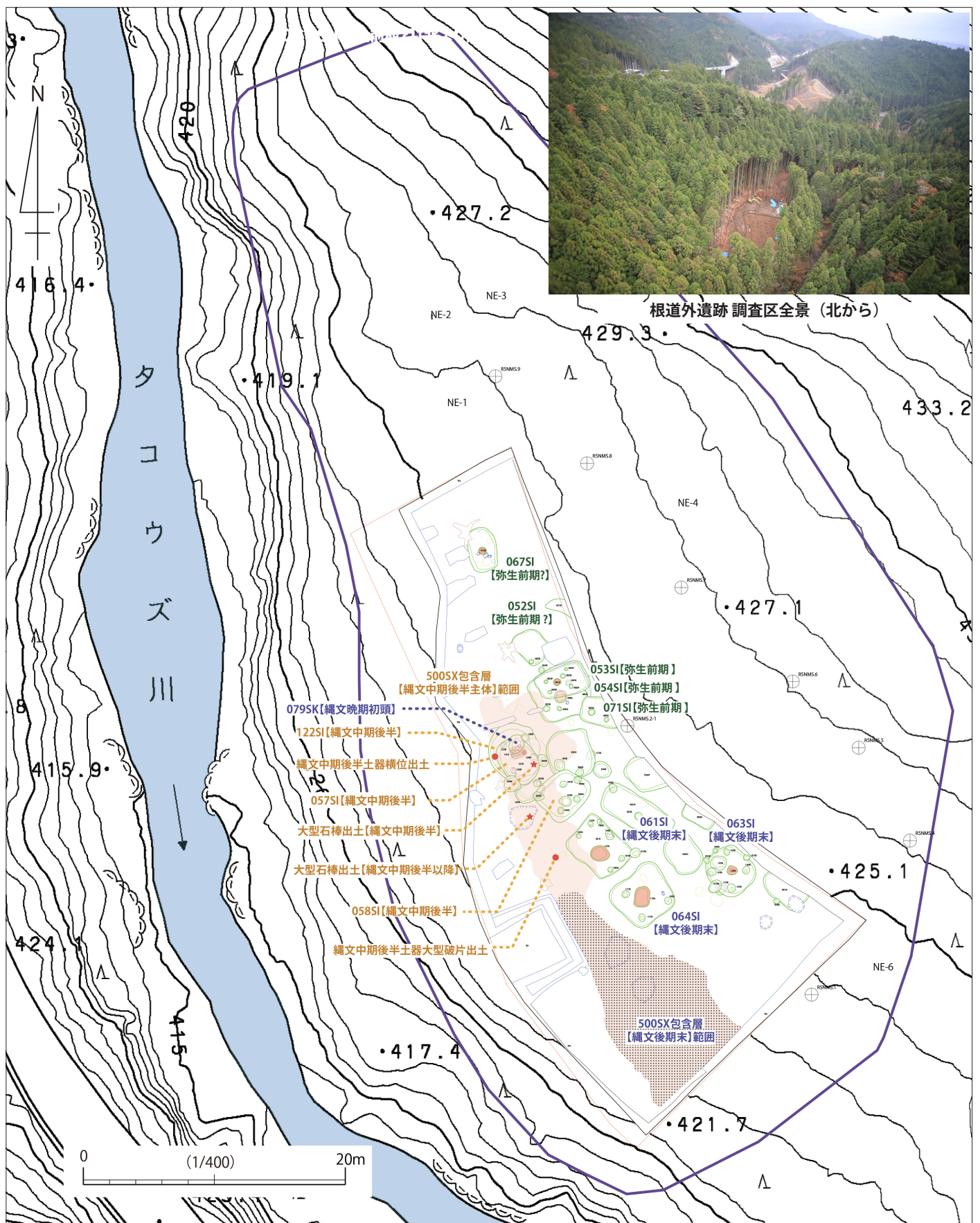
III層：赤褐色礫層（土石流堆積層^{どせきりゅうたいせきそう}1、80cm）【古墳～古代】

IV層：灰褐色粘土（遺物包含層^{いぶつほうがんそう}、20cm）【縄文時代中期～弥生時代中期】

V層：赤褐色の砂礫層（土石流堆積層、20cm）【縄文時代前期か】

VI層：にぶい褐色粘土質シルト層（水成堆積層^{すいせいたいせきそう}、20cm）【縄文時代早期以前か】

VII層：赤褐色礫層（土石流堆積層3、厚さ不詳）【縄文時代早期以前か】



滝瀬遺跡調査区配置図

VIII層：黄褐色粘土・シルト層および黄褐色砂礫層【地山】 　　です。

地形全体は北側が高く南側に向かって低くなっていることに加えて、調査区の中央で堆積層の数が増えています。別の言い方をしますと、調査区の北側半分ではV層～VII層の堆積がなく、IV層下には地山層である黄褐色砂礫層がそのまま認められます。この黄褐色砂礫層はもともと河川由来のもので、旧タコウズ川が開削されて現在の位置に固定してしまう前の段階のとても古い河床の跡であったようです。

発掘調査では、III層上面での見つかった遺構調査（検出1）と、IV層～V層上面で見つかった遺構調査（検出2）とを行いました。

（1）土石流堆積層上の調査（検出1：戦国期以降）

検出1では、耕作地跡が調査区全体で見つかりました。この段階の調査では、調査区外東側をも含めて、広い範囲で中世～戦国期の陶器片が見つかりしています。このことから、少なくとも戦国期以降には、III層の堆積後に地盤が安定し土地利用が活発になされた可能性が高いようです。今回の調査では、残念ながら中世・戦国期と特定できる遺構は見つかりませんでした。見つかった耕作地跡は、近世～近代に営まれたものと考えられます。

（2）土石流堆積層下の調査（検出2：縄文時代中期～弥生時代）

検出2では、縄文時代中期後半から弥生時代の遺構・遺物が見つかりましたが、大きく以下の3つの時期に分けることができそうです。

（2-1）縄文時代中期後半【今から約5,000年前】

縄文時代中期後半の活動痕跡は、調査区中央部付近でまとまって見つかり、^{たてあな}堅穴建物跡が3基見つかりました。このうち堅穴建物跡058SIは一辺4m弱の隅丸方形プランで、中央に大型の土坑、四隅には柱穴と思われる遺構が見つかりしています。この遺構からの出土遺物は少なく、中期後半の大型土器片が遺構底面から出土したのみでした。堅穴建物跡057SIと122SIは重複して見つかりました。057SIは4×3mほどの隅丸方形プランで、底面の中央には焼土の広がりが見られ、南東端では石に囲われた状態で大型石棒がやや横になった状態で出土しました。この石棒は埋土の堆積がある程度進んだ段階で、土坑が掘られて埋設されたもののようです。122SIは掘り方の底面から5～10cm上面に板石が敷かれており、もともとの床面である掘り方から床面が埋められて整えられた跡と思われます。この整えられた床埋土中から、縄文時代中後半の深鉢が一個体、横になった状態で見つかりました。また、本来はこの段階で築かれた石囲炉跡も見つかり、北西隅には副炉が設けられていました。

また、西側斜面下方に向かって、遺物包含層500SXの堆積を確認しました。この堆積層からは深鉢大型破片などがみつかっています。

（2-2）縄文時代後期末～晩期【今から約3,200年前】

縄文時代後期末～晩期の活動は調査区南側が中心ですが、調査区中央にも局所的に見つかっています。竪穴建物跡3基と土坑が調査されています。このうち061SIは平面プランが5×4mの隅丸形状の形をした竪穴建物跡で、地床炉跡の内から土器片がまとまって出土しました。また、062SIは平面プラン5×5mほどの隅丸形状の竪穴建物跡で、遺構掘り方の中央には炉跡に由来する焼土の塊が盛り上げるように見つかりました。おそらく本来は同じ場所に重複して築かれた竪穴建物跡の床面が上位レベルに存在していたようです。竪穴建物跡057SIに重複する形で、土坑079SKが築かれていました。埋土には焼土塊と礫が多量に含まれており、炉跡の構造物などが一括廃棄された跡ではないかと考えられます。また、西側斜面下方に向かって形成された遺物包含層500SXからは、土器片や打製石斧などの石器のほか、有溝石錘や石棒などが出土しています。

（2-3）弥生時代前期【今から約2,400年前】

弥生時代前期は、調査区北側を中心に見つかっています。今回、竪穴建物跡5基が調査されたのは、とても大きな成果となりました。特に良好な状態で見つかったのは、竪穴建物跡053SIと054SI、067SIで、053SI・067SIは4×3m程度、054SIは5×4m程度と、平面プランは隅丸方形でした。いずれも掘り方中央に地床炉跡が見つかり、いずれの炉跡も脇から板石などがみつかっています。炉縁石ではないかと考えられます。また、053SIと054SIでは、床面からは条痕文土器の中でも特に大型壺片が散在して出土しました。

根道外遺跡23区 確認された遺構・遺物一覧

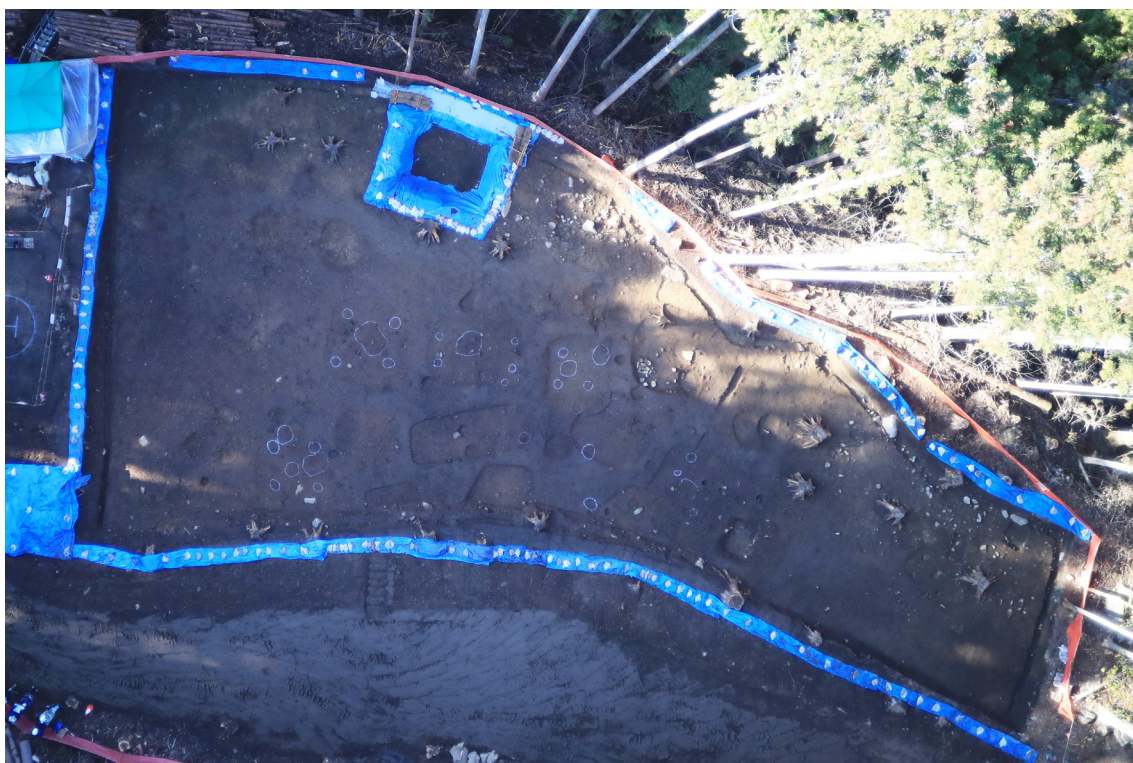
段階	調査層位	時期	検出遺構	出土遺物	備考
検出1	Ⅲ層上面	戦国期以降	耕地跡（水田区角）20以上	縄文土器・石器・山茶碗・天目茶碗など	調査区西端で調査された500SX（遺物包含層）は、傾斜地での層位認識の誤りのため、「検出1」で調査を実施した。
検出2	Ⅳ層およびⅧ層上面（調査区北側） Ⅳ層およびⅤ層上面（調査区南側）	縄文時代中期～弥生時代中期	○縄文時代中期後半【竪穴建物跡3・ピット・土坑・遺物包含層】 ○縄文時代後期末～晩期【竪穴建物跡3・土坑・ピット・遺物包含層】 ○弥生時代前期～中期【竪穴建物跡5・ピット】	○縄文時代中期【土器・石器（石鏃・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）・大型石棒】、 ○縄文時代後期末～晩期【土器・石器（石鏃・打製石斧・剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）・有溝石錘】 ○弥生時代前期～中期【土器・石器（剥片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）】	



土石流堆積層上 遺構検出状況(南より)



土石流堆積層上 遺構掘削状況(南より)



土石流堆積層下 調査区全体(上が西)



石棒出土状況(西より)



包含層500SX 有溝石錘出土状況



竪穴建物跡057SI内 大型石棒(北東より)



竪穴建物跡122SI内土器出土状況(南より)



竪穴建物跡122SI床面検出 1(北より)



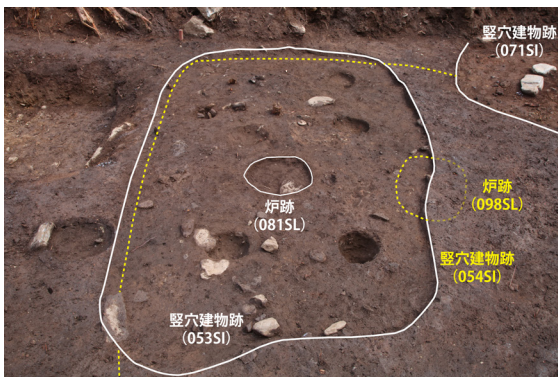
竪穴建物跡122SI床面検出 2(西より)



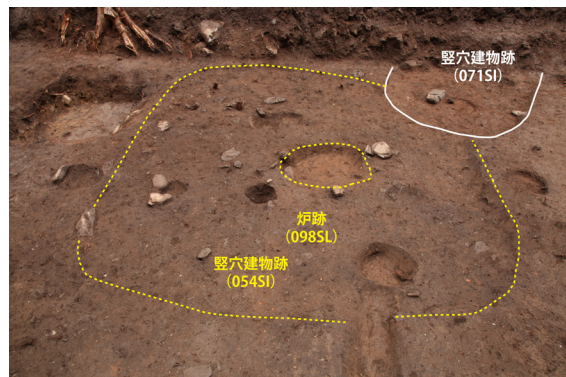
竪穴建物跡061SI 炉跡内遺物出土状況(北西より)



竪穴建物跡064SI 炉跡検出状況(南西より)



竪穴建物跡053SI・054SI・071SI(西より)



竪穴建物跡054SI・071SI(西より)

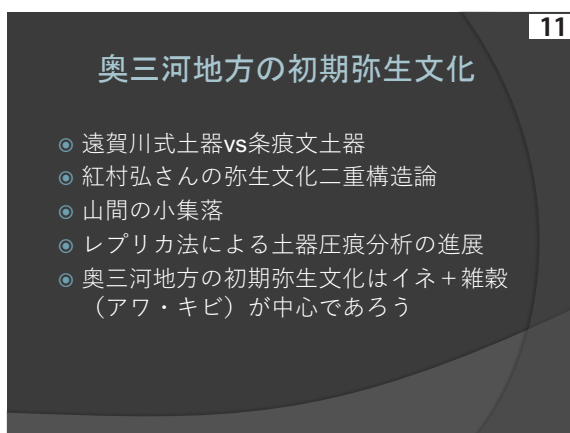
特別講演 設楽が語る、設楽の昔—縄文時代から弥生時代へ

東京大学名誉教授 設楽博己

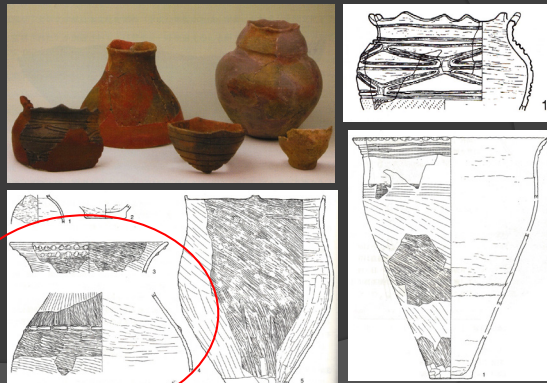
この度、今回の設楽先生ご講演映写資料を掲載します。

縄文時代から弥生時代への始まりについて、従来の考古資料のみならず、植物利用史の観点から、さらには埋葬人骨から採取されたDNAレベルのお話と、最新の研究成果を広く視野に入れて、設楽地域の様相を深くお話し頂きます。(編者謹言)





中屋敷遺跡の土器(条痕文系+東北系+在地) 15



中屋敷遺跡の土坑の検出



昭和女子大『中屋敷遺跡』

中屋敷遺跡の土坑と炭化穀物の出土 17



アワとイネが多量に出土した。トチノキの種子も。

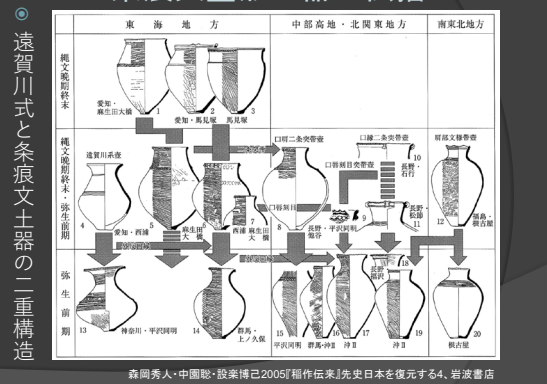
西関東の条痕文系土器の穀物圧痕



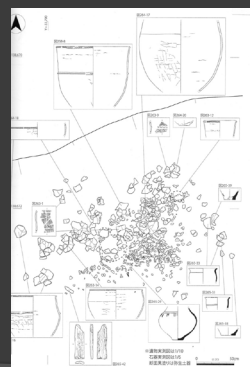
長野県の条痕文系土器
(中川村荻谷原遺跡)



条痕文壺形土器の伝播



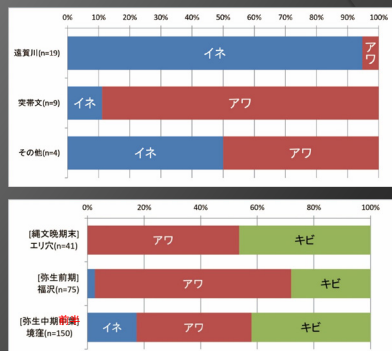
大阪府讚良郡条里遺跡



突帯文土器(長原式土器) 22



23 讃良郡条里遺跡の土器圧痕穀物比率



福沢遺跡

24 弥生農耕の風景



佐々木高明1991『日本史誕生』日本の歴史1、集英社

水田稲作・平野の微高地に立地＝弥生文化のイメージ

25 関東地方の条痕文系文化

- 条痕文系土器の広がり
- 矢作川－天竜川－湯川－群馬
- 遠賀川文化と条痕文文化の違い
- 遠賀川文化＝平野の水田稲作（大陸系）
- 条痕文文化＝台地・丘陵の雑穀栽培（縄文系の生活文化）
- 大陸系と縄文系弥生文化の二重構造

26 引き継がれた縄文人のDNA

27 弥生人のDNA二重構造



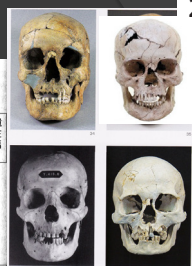
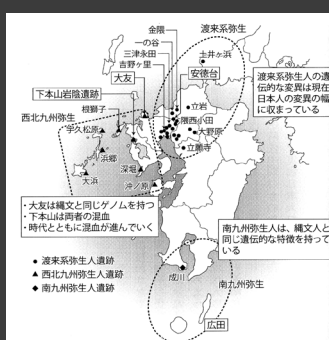
群馬県八束脛洞窟 条痕文系の弥生人のDNAは縄文系

28 北海道礼文島船泊遺跡の縄文人



- 縄文時代後期の23号女性人骨ゲノム完全解読（2019年）
- 現代東アジア集団と異なる
- 血液型A型
- 婚姻のネットワークは狭いが、近親婚ではない
- 南方産のイモガイやビノスガイ小玉のビーズを装着
- 肌の色は濃い目
- 髪は巻き毛
- 目の色は茶色か黒
- 脂肪代謝疾患→海獣食？

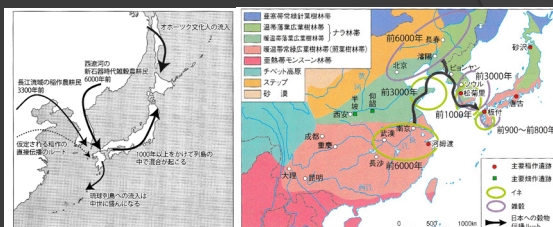
29 弥生人の多様性



北部九州弥生人も縄文人のDNAもつ(安徳台遺跡＝弥生中期)。縄文人をさらに吸収すれば現代人はもっと縄文的。そうでないのは中期以降も渡来人の多さを示す。

篠田謙一2022『人類の起源』

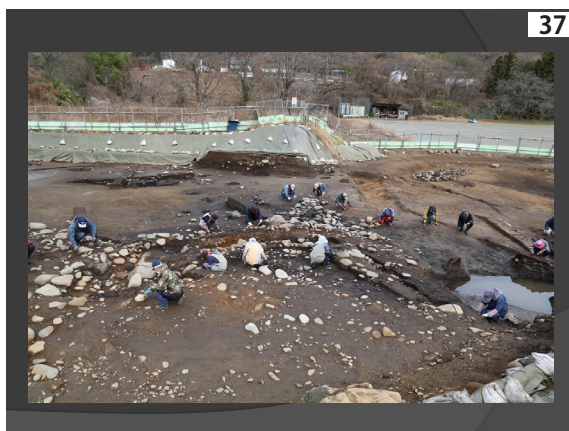
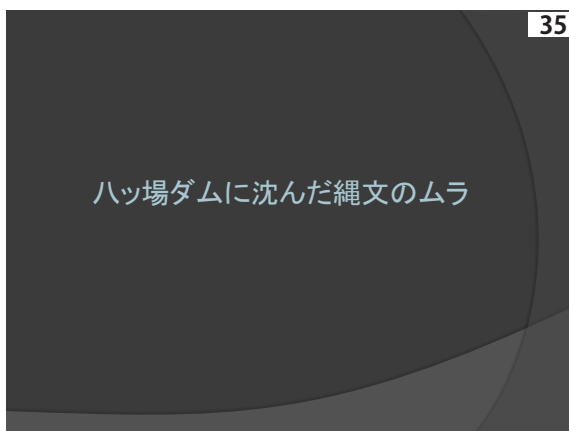
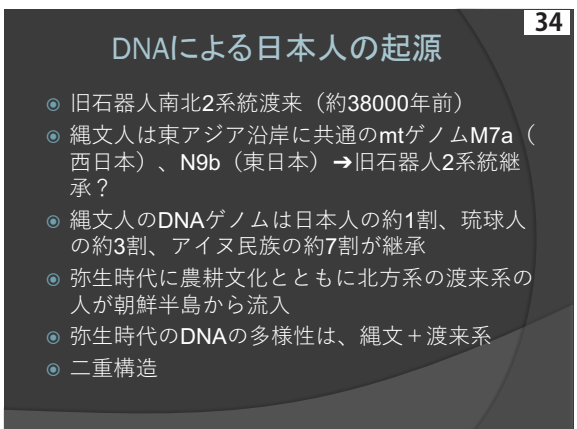
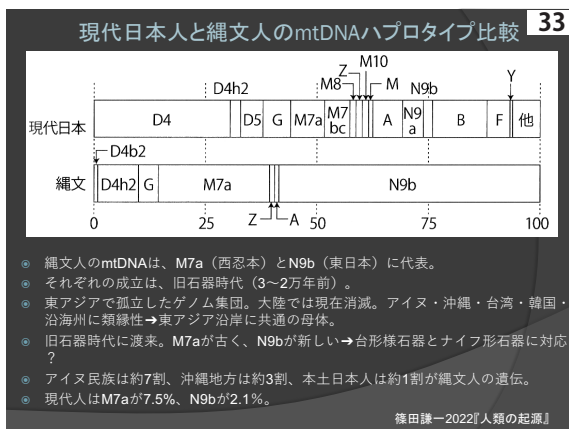
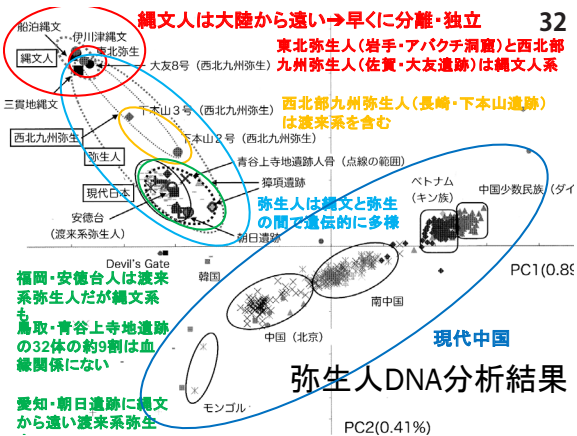
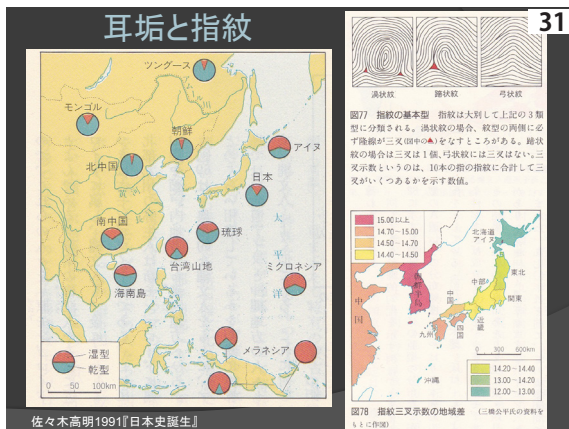
30 渡来人とイネとアワ・キビの来た道

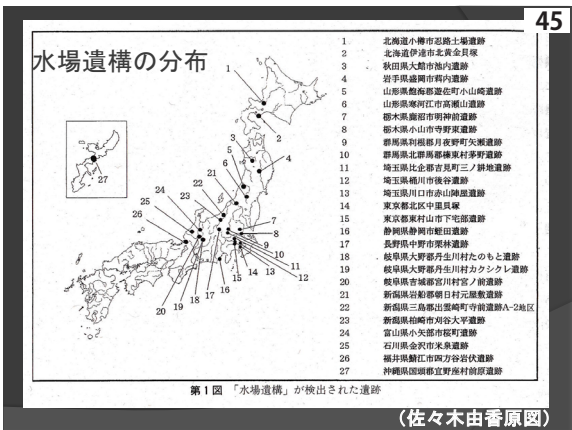
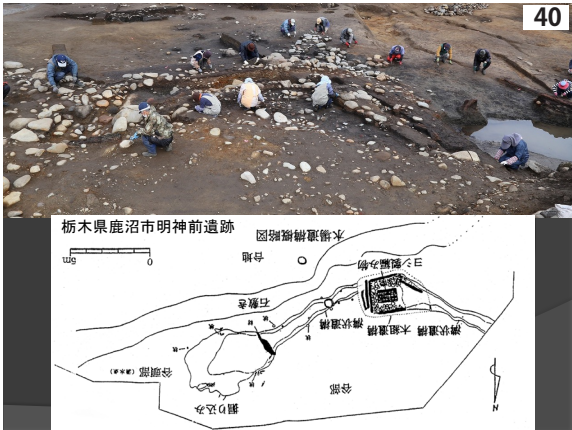


篠田謙一2022『人類の起源』

設楽博己2019『弥生時代』敬文舎

- 現代日本人のハプロタイプの多様性→弥生時代以降の渡来人の影響
- 西遼河の新石器時代雑穀農耕と古代朝鮮、渡来系弥生人が遺伝的連続性→日本列島への雑穀栽培伝来のルート
- 稲作を伝えた長江流域の系統のゲノム解析はこれからの課題





46

設楽町の昔と今

- 水さらし場 = 取水部 (湧水/河川/地下伏流水) → 導水部 (溝/杭列/木樋) → 構造部 (堰/貯水場/足場/作業場) → 排水部 (溝)
- 水田 = 取水部 (水路) → 導水部 (水路/堰) → 構造部 (堰/水口/水田) → 排水部 (水路)
- 灌漑システムと同様の高度なトチノキの実の処理技術
- 設楽町の縄文時代にもアク抜き施設ある?
- 設楽町の初期弥生文化は縄文系 = 群馬と同じ

年代	3500年前	3000年前	2500年前	1500年前	6000年前	5000年前	4000年前	3000年前	2500年前	A.D. 1年	3000年	6000年	7000年	8000年	9000年	10000年	11000年	12000年	13000年	14000年	15000年	16000年	17000年	18000年	19000年	20000年						
時代	後期旧石器時代										縄文時代										平安時代					鎌倉時代		室町時代		江戸時代		近代・現代
主なできごと	台形様石器・ナイフ形石器・局部磨製石斧の出現		鹿児島県始良カルテラ（A.T.）の隆灰		土器の発明・弓矢の使用 氷河期が終わる		貝塚の形成 気候の温暖化による海進		寒冷化し、海退した低地にも生活を始める		拔牙風習の盛行		土器棺墓群が形成される 稲作の開始 環濠集落の出現		金属器の使用・銅鐸の使用		女王卑弥呼邪馬台国を統治する 大和政権の出現・各地に古墳の造営 仏教の伝来		645年 乙巳の変（大化の改新） 710年 平城京遷都 743年 東大寺大仏建立の詔・国分寺 794年 平安京遷都		藤原氏の摂関政治		武士の台頭 1192年 源頼朝鎌倉幕府を開く 元寇（文永・弘安の役）		1338年 足利尊氏室町幕府を開く 1467年 応仁の乱		1575年 長篠の戦い 1603年 徳川家康 江戸幕府を開く		1867年 大政奉還 1945年 太平洋戦争終結			
愛知県の遺跡	上品野遺跡（瀬戸市）		茶臼山遺跡（豊根村） 駒場遺跡（豊川市） 萩平遺跡（新城市） 川向東貝津遺跡（設楽町） 滝瀬遺跡・大栗遺跡（設楽町） 多利畑遺跡（豊橋市） 大安寺遺跡（豊田市） 鞍馬遺跡（設楽町） 石原遺跡（設楽町） 大畑遺跡（設楽町） 大根平遺跡（設楽町） 西地・東地遺跡（設楽町） モリノ下遺跡（新城市） 石岸遺跡（新城市） 笹平遺跡（設楽町） 大名倉遺跡（設楽町） 吉胡貝塚（田原市） 宮嶋遺跡（豊根村） 麻生田大橋遺跡（豊川市） 桜平遺跡（東栄町） 白石遺跡（豊橋市） 瓜郷遺跡（豊橋市） 上ノ口・下ノ口遺跡（設楽町） 西向遺跡（東栄町） 欠山遺跡（豊川市） 馬越長火塚古墳（豊橋市） 屋木下古墳（設楽町） 丸根古墳（設楽町） 三河国分寺跡（豊川市） 白鳥遺跡（豊川市）		大根平遺跡（設楽町） 胡桃堀遺跡（設楽町） 普門寺跡（豊橋市） フヤキ窯跡（東栄町） 武節城址（豊田市） 田家城址（設楽町） 津具城址（設楽町） 吉田城跡（豊橋市）																											
上ノ口・下ノ口遺跡	★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★					
万瀬遺跡	★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★					
下延沢遺跡	★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★					
根道外遺跡	★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★		★					

※記号の大きさは、遺跡内での活動痕跡の多さを示しています。濃い印は今年度調査で確認された活動痕跡を、薄い印はこれまでの調査で確認されたところです。

※記号の大きさは、遺跡内での活動痕跡の多さを示しています。濃い印は今年度調査で確認された活動痕跡を、薄い印はこれまでの調査で確認されたところです。

裏表紙：万瀬遺跡 墓坑内人骨検出作業（近世）

令和5年度
設楽ダム関連発掘調査成果報告会

新設楽発見伝10 配付資料

令和6年3月9日 発行

編集・発行



公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

企画担当・編集

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802 の 24

HP <http://www.maibun.com>

愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴・鬼頭 剛・川添和暁

電話 (0567) 67-4163 【調査課】

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>

X(旧 Twitter) https://twitter.com/aichi_maibun